

## SY3-3

## 委員会活動から小児保健を考える

中井 靖<sup>1</sup>、木村 真司<sup>2</sup><sup>1</sup> 京都女子大学発達教育学部心理学科 <sup>2</sup> 岡山県立大学保健福祉学部看護学科

## 【中井】

若手による小児保健検討委員会の「障害児の未来」をテーマとしたグループでは、第 68 回学術集会ではシンポジウム「性教育の多様性—ミライはどうなっている?—」、第 69 回学術集会ではシンポジウム「ミライに生きる子どもたちへの包括的性教育—セクシャルマイノリティの現状を踏まえて—」を企画・実施した。シンポジストには、小児保健の強みである多職種の視点から、医師、助産師、養護教諭、心理職、国際関係論者が集まり、未来の性教育のあり方を提言した。しかしながら、2 回のシンポジウムによる情報発信では、提言の実現はもとより、十分な啓発には至らないことを実感した。

情報は必要な人に届き、活用されて価値が生まれる。情報発信には、情報の正しさや新しさ、臨床実用性、連続性や段階性などの「情報の内容」と、発信の回数やツール、継続的に情報に触れたいくなる仕掛けなど「情報の発信方法」がある。今回の若手委員会の実施した会員ニーズ調査の結果からは、特に「情報の発信方法」と受信者のマッチングが課題と考えられる。

日本小児保健協会では、eラーニングシステムの稼働を予定している。本協会会員のインセンティブとなるよう、各委員会から講習会等のコンテンツを配信する計画である。このような情報の発信・受信に継続性を持たせるために、日本小児保健協会として、小児保健に関する専門資格を創設するなどの仕掛けが必要である。

## 【木村】

若手による小児保健検討委員会では、小グループに分かれた活動も行っている。「小児保健における ICT の活用」をメインテーマとしているグループでは、第 68 回学術集会ではシンポジウム「コロナ禍における ICT を活用した先進的な取り組み」を企画・実施した。シンポジストには、医療職に加え、情報科学のスペシャリストにも登壇していただいた。コロナ禍における NICU の面会支援・保健指導・きょうだい支援など、ICT を用いた新たな病院での患児・家族を支える取り組みについてだけでなく、アフターコロナを見据えた活用について検討を行った。ICT については、コロナが収束した後も継続して活用が可能であり、検討が継続して必要と考える。

我々のグループでは、2 か月に 1 回オンラインミーティングを開催し、現在は ICT を活用した不登校支援に焦点をあて、実施における工夫や課題について調査を行う予定である。

また、小児保健協会の強みは、多職種が集まることであり、その強みを活かした活動が求められる。日本小児保健協会が多職種連携の場となれるよう、学術集会や研修会での場の提供や、ICT を用いて遠く多職種との連携を図ることができる仕組みが必要であると考え。関心あるテーマでディスカッションを重ねた我々のグループの成果が、多職種連携のモデルケースとなることを期待する。

本シンポジウムを通じて、日本小児保健協会の魅力を再認識し、多職種で盛り上げる一助としたい。